

浦和大学子どもコミュニティセンターにおける 親子並行プログラムの意義に関する一考察

— 参加者アンケートの結果から —

○丸谷 充子 ○市川美恵子 大久保秀子
伊志嶺美津子 櫃田 紋子 菅野 陽子
船木 美佳 五十嵐裕子 柴田 崇浩

要約

子どもコミュニティセンターでは、親子のひろば「ほっけ」の参加者である親子を対象に、学生による保育付きのプログラムを実施してきた。今回、新たに親子それぞれが並行してプログラムに参加する親子並行プログラムを実施した。親プログラムは、名称を「My Own Time ～わたしの時間～」とし、参加者である母親にひととき子どもと離れた自由時間を提供する内容とした。子どもプログラムは名称を「おにいさんおねえさんと遊べるタイム」とし、親から離れて1人で学生と一緒に遊ぶ内容とした。終了後のアンケートでは、親プログラムは気持ちがりフレッシュし、子どもへの気持ちを再確認できる機会となり、子どもはプログラムへの参加が社会的経験となり、親子で共に成長する機会となった等の感想が得られた。アンケートの内容、子どもプログラムの観察と学生への聞き取り、その後の親子の様子から、プログラムの内容について考察し、大学でプログラムを行うことの意義を検討する。

キーワード 親子のひろば、親子並行プログラム、子どもと育つ、ノンプログラム型

目次

1. 親子並行プログラムの目的
2. 親子並行プログラムの概要
 - 2-1 親プログラム「My Own Time ～わたしの時間～」
 - 2-2 子どもプログラム「おにいさんおねえさんと遊べるタイム」
 - 2-3 募集の方法
3. アンケートの内容と結果
 - 3-1 プログラム参加の理由
 - 3-2 親プログラムでの過ごし方
 - 3-3 親プログラムに参加しての感想
 - 3-4 今後の親プログラムの内容についての希望
 - 3-5 子どもプログラムに子どもを参加させた感想
 - 3-6 親子が並行してプログラムに参加する形式についての感想
 - 3-7 今後のプログラム参加希望の有無とその理由
4. 子どもプログラムにおける子どもと学生の様子

5. 考察

- 5-1 親へのプログラムを提供する意義
- 5-2 子どもへのプログラムを提供する意義
- 5-3 親子に並行してプログラムを提供する意義
- 5-4 プログラムの参加者を「ぼっけ」利用者対象に限定する意義
- 5-5 大学がプログラムを提供する意義

6. 今後の課題

1. 親子並行プログラムの目的

学校教育と地域社会との連携のための拠点である「こどもコミュニティセンター」では、地域住民に向けて、子育て支援のための親子のひろば「ぼっけ」（以下「ぼっけ」と記す）を大学内に設置し、学生と親子が共に育つ場として、学部の理念に基づいた多様な取り組みを行ってきた。主として0歳から3歳までの乳幼児とその親の子育てを支援する場であると同時に、学生が子どもや親子、家族、地域の人々と直接触れ合うことができる実践的な学習の場として様々な機能を持ち、これまでも様々な取り組みを行ってきた（櫃田2008）。

今回その一環として、親と子が同時時間帯にそれぞれ別のプログラムに参加する親子並行プログラムを企画実施した。日ごろ在宅で過ごしている親子が、それぞれのプログラムに参加して、ひととき離れた時間を過ごすことで、お互いの存在を新鮮に感じ、母親にとっては新たな気持ちで子育てに向かうことができ、子どもにとっては成長の機会となるような内容を目指した。

プログラム終了後に参加者へのアンケートを実施し、そのアンケートの内容を検討することと、子どもプログラムにスタッフとして参加した学生の様子と終了後の振り返り、その後の親子の姿から、親子と学生にとってプログラムにどのような意義があったかを検討する。

2. 親子並行プログラムの概要

2-1 親プログラム「My Own Time ～わたしの時間～」

プログラムの名称 : 「My Own Time ～わたしの時間～」

日時 : 2012年6月21日（木）、28日（木）

午前10時から12時（子どもの受け渡しを含む）

内容 : 学内の図書室、食堂、談話室、大学の庭のいずれかの場所で、親が一人で、または友人同士で、自分自身のための自由な時間を過ごすというノンプログラム型のプログラムとした。参加者は、子どもをプログラムに参加させた後、親のプログラムとして自由な時間を過ごし、プログラム終了時刻に子どもを迎えにいき、親子が再会したところで、子どもと親のプログラムが同時に終了となる。約束事として、学内で過ごすこと、子どもプログラムの緊急時の連絡方法として携帯電話を手元に置くこととした。

2-2 子どもプログラム「おにいさんおねえさんと遊べるタイム」

プログラムの名称：「おにいさんおねえさんと遊べるタイム」

日時：（親プログラムと同じ）

内容：普段は親と一緒に来室して遊んでいる「ぼっけ」の中で、その親から離れて1人で学生と自由に遊ぶ体験をする。

スタッフの構成は表1の通りである。15名の子どもに対して、保育士4名と教員が1名、学生が12～13名参加し、保育士と教員が見守る中、学生と子どもがほぼ1対1の体制でプログラムを行った。

プログラム開始時は、保育士と学生とで出迎え、子どもの状態の観察と、あらかじめ記入を依頼し当日持参してもらった保育カード（健康状態、排せつ、睡眠、好きな遊びなどの内容）の確認を行った。学生は担当した子どもに責任を持ってかわり、泣いている子どもに対しては気持ちが静まるまで寄り添い、遊び始めた子どもには安全に楽しく遊べるように配慮しながら子どもの遊びの援助を行った。終了時は、子どもを親の元に返した後、その親にプログラムでの様子を保育士と学生がそれぞれの言葉で伝えた。離れている時間の様子を伝えることで親が安心でき、親の前にいる時とは異なるわが子の姿を知ること、親の子どもに対する理解が深まり、親子の離れた時間が有効につながるような援助を行った。

2-3 募集の方法

「ぼっけ」を利用している親子を対象として、「ぼっけ」内でのポスターの掲示により参加者の募集を行った。プログラムは平日2日の実施とし、2日とも子どもの定員を15名とした。1日参加、2日参加のどちらの申し込みも可能として募集を行った。募集開始時から反響が大きく、2日とも参加申し込みをする参加者が多かった。募集開始後数日で、申し込み者の延べ人数が定員の2倍以上になったため、募集を打ち切った。なるべく多くの親子が参加できるように、2日間の参加希望の応募者を1日のみの参加とする調整を行い、2日間で母親25名、子ども28名の参加となった。

表1 子どもプログラムのスタッフと人数（人数）

	保育士	教員	学生	学生内訳	計
1回目	4	1	13	2年5 3年6 4年2	18
2回目	4	1	12	2年5 3年5 4年2	17

3. アンケートの内容と結果

参加者25名に対してプログラムに関するアンケートを行い、回答が得られた21名について内容の検討を行った。アンケートは無記名で行い、プログラム終了後に回収した。質問に対して自由記述で回答する形式で、今後の参加希望の質問のみ「はい」「いいえ」「どちらでもない」からの選択とした。回答が得られた参加者の概要は以下の通りである。親子の年齢は表2、3の通りである。参加した親は全員母親であった。母親の年齢は、30代前半が最も多く、次が30代後半であった。子どもの年齢は、1歳代が最も多く、次が2歳代であった。核家族か祖父母世帯と同居か、きょうだいの有無に関しては表4の通りである。核家族が19組、祖父母と同居2組、第1子のみ参加が15組、第2子のみ参加が4組、第1子と第2子のきょうだいでの参加が2組であった。参加者の中で託児経験のある子どもは3名で、いずれも一時的な預かり保育の利用であった。残りの20名は、母親、親族から離れる経験は初めてだった。

表2 参加した母親の年齢（人数）

母親の年齢	
～24歳	3
25歳～29歳	1
30歳～34歳	10
35歳～39歳	6
40歳～	1
計	21

表3 参加した子どもの年齢と保育経験者（人数）

子どもの年齢		託児経験者
3ヵ月	1	0
8ヵ月	2	0
1歳代	12	2
2歳代	8	1
計	23	3

表4 家族構成ときょうだいの有無（人数）

参加した子の出生順位	核家族	祖父母と同居	計
第1子のみ参加	15	0	15
第2子のみ参加	3	1	4
きょうだい参加	1	1	2
計	19	2	21

3-1 プログラム参加の理由

21名から33項目の理由があげられた。内容を大別すると、「自分の時間がほしかった」、「子どもと離れたい」など、親の理由があげられているものと、「子どもに親と離れる経験をさせたい」など、子どもについての理由をあげているもの、親子双方に分けがたい理由とに分かれた。

親の理由としては、「自分の時間がほしい」が、参加動機として一番多くあげられた。「子どもと離れたい」と合わせると全体の75%の参加者があげている理由である。他、「ゆっくりできそう」「自分が子どもと離れていられるか試してみたい」と、大学への興味や機能の利用として「大学内を見学してみたい」「本を読みたい」があげられた。

子どもについての理由としては、子どもを自分や親族以外の人に託すとどのようになるのか「預けて子どもの様子を見てみた」「親から離れる経験をさせたい」「学生や他の子どもなどとのふれあいを経験してほしい」などの理由があげられた。

親の理由か子どもについての理由か分けがたい理由として、「親子が離れて過ごすことも大切」、「母子分離を体験してみたかった」など、親子双方にとって分離の体験をすることが理由としてあげられた。他に「すすめられたから」「何かのきっかけになれば」という理由もあげられた。

表5 プログラム参加の理由（全体）（複数回答）

プログラム参加の理由	人数	%
1人の（自分の）時間がほしかったから	9	42.9
預けてみて子どもの様子を見たい	5	23.8
親から離れる経験をさせたい	4	19
子どもと離れたい	3	14.3
お兄さんお姉さんや他の子とふれあってほしい	3	14.3
ゆっくりできそう	1	4.8
自分が子どもと離れていられるか試してみたかった	1	4.8
大学を見学してみたかった	1	4.8
本を読みたい	1	4.8
子どもの成長がみたかった	1	4.8
親子が離れて過ごすことも大切と思った	1	4.8
母子分離を体験してみたかった	1	4.8
すすめてもらったから	1	4.8
日中家にこもりがちになるので何かのきっかけになれば	1	4.8

*表5～表9の%は、回答数（人）を親の参加人数（21）で除したものである。

表6 プログラム参加の理由（表5のうち親の理由）

プログラム参加の理由（親の理由）	人数	%
1人の（自分の）時間がほしかったから	9	42.9
子どもと離れたい	3	14.3
お兄さんお姉さんや他の子とふれあってほしい	3	14.3
ゆっくりできそう	1	4.8
自分が子どもと離れていられるか試してみたかった	1	4.8
大学を見学してみたかった	1	4.8
本を読みたい	1	4.8

表7 プログラム参加の理由（表5のうち子どもについての理由）

プログラム参加の理由（子どもの理由）	人数	%
預けてみて子どもの様子をみたい	5	23.8
親から離れる経験をさせたい	4	19
お兄さんお姉さんや他の子とふれあってほしい	3	14.3
子どもの成長がみたかった	1	4.8

表8 プログラム参加の理由（表5のうち親子双方の理由）

プログラム参加の理由	人数	%
親子が離れて過ごすことも大切と思った	1	4.8
母子分離を体験してみたかった	1	4.8
すすめてもらったから	1	4.8
日中家にこもりがちになるので何かのきっかけになれば	1	4.8

3-2 親プログラムでの過ごし方

「友人と一緒に参加しておしゃべりをした」という参加者と、図書館で読書をするなど一人で過ごした参加者がいた。学校の食堂でお茶、ランチをした参加者が半数あった。

3-3 親プログラムに参加しての感想

「ゆっくり過ごせた」「リフレッシュとなった」「好きなことをしても良いところが良い」など親プログラムの内容に関しての感想と、「親子で成長できる場となった」、「子どもに対する気持ちが再確認できた」など、親子が離れたことに関しての感想、「良い企画、助かる」「保育料がかからないのが良い」と企画に関しての感想があげられた。「何をしようか迷った」と、いざ離れてみると一人の時間に戸惑いを感じた内容の感想があった。

表9 親プログラムの過ごし方（複数回答）

内容	人数	%
ママ友とおしゃべり	12	57.1
お茶・学食ランチ	11	52.4
図書館で読書	9	42.9
大学の庭を散歩	1	4.8
談話室で一休み	1	4.8
電話・メール	1	4.8

表10 プログラムに参加しての感想（複数回答）

内容	人数
ゆっくり過ごせた	5
良い企画、助かる	3
離れてみて子どもに対する気持ちが再確認できた	2
親子で成長できる場となった	1
リフレッシュとなった	1
好きな事をしても良いところが良い	1
保育料がかからないのが良い	1
何をしようか迷った。何か勉強することを考えてくれば良かった	1
無記入	7

3-4 今後の親プログラムの内容に関する希望

「また同様の機会を作ってほしい」と今回と同様のプログラムの希望が4名だった。他は、親が過ごす場所を、「大学から出て過ごしたい」、「家事をしたい」など、大学を出て過ごしたいという希望があげられた。内容については、「母同士で語り合いたい」、「ヨガなどの運動をしたい」、「食事をしたい」、「子育てのことで先生と話しをしたい」などの希望があげられた。時間については、「もう少し長い時間（午後）預かってほしい」「時間を気にせずきままに過ごしたい」などがあげられた。

3-5 子どもプログラムに子どもを参加させた感想

「若い大学生と遊べるのが良い」、「将来を担う学生さんの勉強になるということ」と、大学生がスタッフとして参加することをあげた感想と、「いろいろな人と関われるのが良い」「子どもが成長して帰ってきた」など子どもの経験や成長に関する感想、「安心して預けられる」「丁寧に接していただけて良かった」など、プログラムに関する内容があがり、他に「見学したい気持ちがあった」、「初めてだったので新鮮」、「良かった」などがあがった。

表11 親プログラムの今後の希望（複数回答）

内容	人数
また同様の機会を作ってほしい	4
大学から出て過ごしたい	3
母同士で語り合いたい	2
家事をしたい	2
ヨガなどの運動	1
子育てのことで先生と話したい	1
友達と食事をしたい	1
もう少し長い時間（午後）預かってほしい	1
時間など気にせず気ままに過ごしたい	1
無記入	8

表12 子どもプログラムに子どもを参加させた感想

内容	人数
若い大学生と遊べるのが良い	4
安心して預けられる	3
いろいろな人と関われるのが良い	3
子どもが成長して帰ってきた	2
丁寧に接していただけて良かった	1
見学したい気持ちがあった	1
初めてだったので新鮮	1
良かった	1
将来を担う学生の勉強になるのが良い	1
無記入	4
計	21

3-6 親子が並行してプログラムに参加する形式についての感想

記入された感想はすべて肯定的な内容であった。「お互いにとって良い経験となった」、など、親子双方にとっての内容が一番多く、「ゆっくりできた」「助かる」など親の理由が続き、「子どもを安心して参加させられた」と子どもについての理由もあがった。

3-7 今後のプログラム参加希望の有無とその理由

(1) 参加希望の有無

今後同様のプログラムを実施する場合、参加を希望するかどうかを、「参加したい」「参加したくない」「どちらでもない」から選んでもらい、自由記述で理由をたずねた。参加の有

無に関しては、21名中20名が参加希望で、無記入の1名については、自由記述欄に「帰って子どもの様子を見てから判断したい」との記入があった。

(2) 参加希望の理由

「またリフレッシュしたい」、「親のリフレッシュが子どもに良い影響がある」との親の理由、「親子双方にとって良い刺激になる」との親子双方にとっての理由と、「子どもを安心して預けられる」と子どもについての理由があがった。

表13 親子並行プログラムの形式についての感想

内容	人数
お互いに良い経験になった	6
とても良い	3
ゆっくりでき、ストレス解消になった	3
子どもプログラムに安心して参加させられた	3
助かるが保育の方が大変	2
月に1回くらいで実施してほしい	1
無記入	3
計	21

表14 今後の参加希望

今後の参加希望	人数
参加したい	20
参加したくない	0
どちらでもない	0
無記入	1
計	21

表15 参加希望の理由

内容	人数
またリフレッシュしたい	8
親子双方にとって良い刺激になる	5
親のリフレッシュが子どもに良い影響がある	3
子どもを安心して預けられる	1
無記入	4
計	21

4. 子どもプログラムにおける子どもと学生の様子

筆者はスタッフとして参加しながら子どもと学生の観察を行った。

プログラムの始まりは、保育士が順次受け入れを行い、子どもの様子の観察と、健康状態や生活上で必要な内容が記入されている保育カードの内容についての確認を行い、親を親プログラムに送り出した。保育士と教員が見守る中で、学生と担当する子どもとが出会い、プログラムが始まった。母親から離れる初めての体験に、「ママ、ママ」と泣いて出入り口のドアから離れず学生が目に入らない子ども、スタッフや学生が側に寄ることを拒否する子どもなど、プログラム開始後数十分は、子どもにとっても学生にとっても、厳しい時間が続いた。泣き続ける子どもを抱いて声をかけ続ける学生、気持ちを変えようと、次々におもちゃを提示する学生、抱かれることを拒否され、手だてが思い浮かばず、子どもの傍らにいない学生がいた。子どもの状態と学生の取り組みに応じて、いったん保育士が子どもを引き取りなだめたり、何とかなだめようと試みている学生に対しては保育士が抱き方、声掛けの仕方、その子どもの興味や年齢に合ったおもちゃの提示の仕方などを助言した。その後しだいに落ち着き、遊び始める子どもの数が増えていった。

楽しく遊べるようになってくると、学生と担当の子どもとの結びつきが強まっていく様子が観察された。子どもは担当学生に対して笑顔を見せ、「遊んで」とおもちゃを渡すなど、信頼し始めた様子に変わっていった。子どもは親が側にいないという危機の状態から、親以外の頼りにできる他者の存在に気付き、親とは違う方法ではあるが、自分に寄り添おうとしてくれる学生に対して信頼を寄せていった。学生は、泣いている子どもの気持ちの立ち直りを支え続けたことや、自分を信頼して遊び始めた子どもの姿から、学生にとって担当している子どもが他の子どもとは違う特別な存在と感じ始めるという変化が見られた。子どもから信頼される喜び、信頼を得られるまであきらめずに働きかけを行い、子どもの姿を変えることができた達成感、信頼に応える責任感を感じたことが、学生の様子と振り返りの内容から読み取れた。「ほっけ」で親と一緒に過ごす子どもに対して遊びの援助をする時にはこのような体験をすることは少ない。しかし保育の現場では必ず出会う、子どもが泣いても、責任を持って引き受けること、それを感じた子どもから頼りにされることを通して保育者と子どもとが信頼関係を深めていく過程を体験する機会となったと思われる。

プログラム終了後の振り返りの会と終了後の感想文では、「泣いて困った」と泣かれた時の対応は多くの学生が困ったことに加え、焦ってしまった気持ちを共有し、対処の方法について話し合うことができた。子どもの遊びの援助では、「おもちゃを投げたら危ないと注意をすると余計投げてしまった」「保育カードに「音の出るおもちゃが好き」と書いてあったのでカスタネットを渡すがなめてしまったので、違うおもちゃを渡すが興味を示さずどう援助したら良いのか困った」「トイレトペーパーで遊んでしまったが止めることができなかった」などの困った場面を体験したり、「おむつの取り換え方が解った」など、授業で学んだことを体験する場となり、自信につながる体験をした学生もいた。また、上級生と下級

生と一緒にプログラムに参加することで（表1参照）、「先輩がどう対応するのかを見学できた」と、先輩の行動が自分でも可能と思われる身近なモデルとなる効果があった。一方、下級生と一緒に参加することで、下級生から後姿を見られていることを、上級生が意識して行動する効果があった。下級生と一緒に参加することで見えた下級生の戸惑いは、かつての自分の姿でもあり、「下級生に適切にアドバイスができなかった」と、下級生の行動を否定せずに自分が経験してきたことを伝えることの難しさを経験することができた。

定期的に「ぼっけ」に入り、週に1回の割合で一緒に遊んでいるAちゃんを担当した学生は、プログラム開始後20分近くそのAちゃんに泣かれることを経験した。学生は、自分はAちゃんから受け入れられていると思っていたので、母親がいなくてもいつものように楽しく遊べるものと予想していた。ところが母親がいないと、「ママ」と泣き続けて学生を受け入れられない状態が続き、「ぼっけ」での関係は、子どもは母親を安全基地としながら、学生と遊んでいたこと、「ぼっけ」と自分に慣れている子どもであっても、母親と一緒にではないことは、子どもにとって大きな違いであることに気付いた。学生は、泣いているAちゃんの姿に「このままぼっけが嫌いにならないか」と、不安を感じながらも、これまでその子どもと関わってきた経験から、Aちゃんに受け入れられそうな接し方でかかわりを続けた。その後Aちゃんは次第に落ち着き、親子で来室した時のようにその学生と遊ぶことができた。学生にとって親子とのかかわりと、子どもだけとのかかわりの違いを学ぶ機会となった。

保育所でのボランティアの経験を生かして子どもにかかわることができ、学生の学びにつながった例もあった。保育カードの活用の仕方がわからなかったり、その存在を忘れていた学生が多かった中、ボランティアでの保育経験をもとに、保育カードを活用し、記入内容を手掛かりに、好きな遊びを取り入れて子どもとかわろうとした学生がいた。その学生が担当した子どもは8カ月の乳児で、「手におもちゃを持ち、音を鳴らす」という保育カードの記入内容を読み、カスタネットを渡してみたが、打ち鳴らすのではなく舐めてしまうため、他のおもちゃに気を向けようとしたが、カスタネットを離そうとせず困った経験をした。他にもカプラを打ち鳴らすのではないかと想定して渡すと、やはり舐めてしまった。8カ月児であれば、親は「がらがら」のように舐めても安全で、音が出るおもちゃを念頭にカードを記入したと思われる、子どもの発達を想定して保育カードに目を通し、その子どもの日ごろの興味と合致するような環境を提供することについて、反省から学びを得た。ボランティアの経験を活かして、保育カードを活用しようと試みたことで、より効果的に活用できるためには、発達の視点や保育者としてのスキルが必要であることを実感し、今後の学びにつながる機会とすることができた。

5. 考察

プログラムの参加者全員が母親であり、その大部分が核家族で、第1子が1、2歳であり家族以外に子どもを預けるのが初めてという親子であった。平日に実施している「ぼっけ」に参加することができること、これまで子どもを他者に託す経験がないことから、出産以来子

育てと家事に専念してきている母親の参加が多かったと思われる。募集の段階から母親たちの関心が高く、プログラムの内容を知るとすぐに参加申し込みを行う母親が多かった。ほとんどの参加希望者が2日とも申し込みをして、当日を楽しみにする様子があり、プログラムへの期待の高さがうかがえた。親プログラムの時間を一緒に過ごそうと、その場ですぐに友人に連絡をとって参加を誘う母親や、1人で数名分の申し込みができないかと聞いてきて、仲の良い「ママ友」にも情報を伝え、一緒に時間を過ごそうとする母親がいた。今回は友人同士の参加であっても各自申し込みをする形式としたが、グループの扱いについては今後検討していく必要がある。

5-1 親へのプログラムを提供する意義

プログラム参加者には、2つの傾向が見られた。

第一に、1人の、または自分の時間を持つことに対する解放感に関する内容である。プログラムに参加した理由で、一番多かった内容は、1人の時間や自分だけの時間を持ちたかったというもので、いつも一緒にいる子どもと離れた時間を過ごすことは、母親たちにとって魅力的であることがうかがえた。実際に、母親にとっての1人の時間、自分だけの時間とはどのようなことを意味するのか、「1人で過ごしたかった」と回答した参加者がどのような時間の過ごし方をしたかを見てみると、必ずしも1人で過ごしていたわけではなく、1人で過ごしたいと希望した母親の半数以上が、「ママ友」とのおしゃべりに時間を使っていた。この事から母親の考える「1人」や「自分だけの」時間は、必ずしも1人きりで過ごすことではなく、子どもと離れて、「私個人」として行動するということを意味していると推測された。日頃子ども連れで一緒に過ごしているママ友と、子どもと離れて大人だけでおしゃべりすることは、同じ「ママ友」と過ごす時間であっても、いつもと違う非日常の時間であったことがアンケートから読み取れた。

子どもを持つと、子どもという他者に寄り添い続ける日々を過ごす中で、初めのうちは親になって子ども中心の生活に変化したことに違和感があるが、次第に自分のことは後回しの生活が日常になっていく。プログラムの参加者は、子どもを預けることが初めてという母親が多く、子どもと一緒にいる生活が、出産以来続いている母親がほとんどであろうと思われる。プログラムで、「あなた自身のために時間を使ってください」というメッセージを込めた時間を提供されることで、2時間という限られた時間であっても母親役割から解放されたと感じられたのだと思われる。終了後の感想として、「リフレッシュできた」と答えた参加者が多く、「子どもへの気持ちを再確認できた」「子どもへの愛情が増した」と、ひと時自分を優先する時間を過ごしたことでリフレッシュし、「毎日の育児も今回のようなプログラムがあれば頑張れる」と、再度プログラムに参加したいと答える参加者が大半であった。

第二に、子どもと離れる経験に関する内容である。将来的には子どもと親は離れていくという意識はあるが、これまでは機会がなかった。プログラムに参加することで、親子が離れる初めての機会、または練習の機会にしたいというものであった。それは、子どもにとって

の経験と同時に、母親自身が、子どもと離れた時、「母親である自分はどのような気持ちになるのか?」「子どもと離れていられるのか?」と、今では日常になっている子ども中心の生活から離れた時の自分の気持ちを体験してみたいというものであった。

プログラム中の過ごし方としては、表9のとおり、友達と過ごした参加者と、図書館などで1人で過ごした参加者とがほぼ半数ずつの割合であった。どちらの参加者も「ゆっくり過ごせた」「リフレッシュできた」など過ごした時間に満足したと思われる感想であった。学生食堂を利用して昼食をとった参加者が半数以上あった。その表現に「学食でランチ」と表現した回答が半数近くあったのが特徴的であった。母親たちが昼食をとる時にランチと呼ぶ時には、ハレの気分が込められている事が多い。普段子どもと利用している学生食堂の利用がランチという言い方になった事から、プログラムの中で子どもと離れて昼食をとることは、母親にとって非日常の時間であったことが読み取れた。また、「助かる」「久しぶりにゆっくりできて感謝」など、プログラムの内容を母親自身へのサポートとしてとらえての、感謝の言葉もあった。

親子並行プログラムのとらえ方は、母親によって親子どちらのプログラムを主に考えるかでの相違があった。子どもプログラムを親プログラムの子どもの預かりととらえて、保育がありがたいと感想に書いている参加者がいる一方で、子どもに学生や他の子どもと触れ合う経験をさせる事が目的でプログラムに参加する参加者もあった。第2子と一緒に参加している母の中に、参加理由を、子どもに友達とふれあってほしいことをあげて、母の自由時間の過ごし方については、家に帰って家事をしたいと希望している母親が複数あり、その母親達からは第1子のみ母親のような親プログラムに対しての期待感を感じられなかった。家事をしたいと答えた母親たちは、第1子の子どもが小学生と年齢が高かった。しかし、参加している第2子に関しては保育経験がないことから、子どもと過ごしている時間は、第1子のみ母親と同じ程度だと予想される。このことは、第1子の保護者会やお稽古事などがあり、母親自身もそれらの用事により気分転換ができる機会がある、母親になってからの年数が第1子の母親より長いと、母役割が自身の役割の1つとして統合されており、負担感や拘束感などの葛藤が少なくなっている、第2子ということで母親自身が第1子の時より子育てのスキルが上がり余裕があるために負担感が少ない、きょうだいがいることで、1人の子どもと密着した関係ではないため、あえて離れる時間を作る必要がない、第1子の経験から、ある時期になると自然に親子は離れていくことを経験しているため、現在の子どもの密着した時間を楽しんでいるため離れて解放感を感じる必要がないなど、様々な理由が考えられる。

一方で、第2子と参加した母親の中にも、前述の母親たちとは違い、「自分が子どもと離れていられるか試したい」と、母親自身の参加理由をあげている参加者があった。プログラムに参加して子どもと離れてみると、「何をしたらよいかわからなかった」と、1人で過ごす時間に強い戸惑いを感じ、プログラムが自分自身の戸惑いについて考えるきっかけとなっていた。プログラムの感想として、「自分がやりたいこと趣味・興味が何なのかわからなかった。自分も外に目を向けろんなことをやりたいと思うようになりたいと思った。」と述べ、

1人になってみると、何をしたいのかわからない自分と出会って戸惑い、子どもと離れるためには、外の世界へ目を向けて代わりの何かを見つけることが必要なのではないかと思いはじめた。そのような母親にとっては、1人の自由な時間は、普段は意識してこなかった自分自身について考える時間となり、1人になることで心もとなさを感じた時間となっていた。プログラムの内容についての希望で、子育てのことで先生と話したい、親同士のコミュニケーションの時間をとりたいと希望しており、子どもと離れて、外の世界に目を向けるためには、子育てや親自身のことについて話をする他者を必要としていることがうかがわれた。櫃田(2008)は、「「ひろば」は直接的には育児支援の場であるが、同時に親自身がアイデンティティを立て直すのを支援する場でもあるといえる。」と述べており、親プログラムは、母親自身がアイデンティティを立て直すための、きっかけとなっていたことがうかがわれた。

5-2 子どもへのプログラムを提供する意義

子どもプログラムが託児ではなく、子どもを主体として学生と遊ぶ内容を打ち出したプログラムであることで、母親がプログラムを子どもの経験の場として、また成長の機会としてとらえ、参加意欲を高める効果があったと思われた。また、大学が実施したプログラムであること、提供する場所が遊び慣れた「ほっけ」であること、保育の勉強をしている大学生が保育士と教員の指導を受けながら子どもと遊ぶことに安心感を持ったことがうかがえた。プログラム終了後の感想では、「緊張せずに預けられた」「保育が安心だった」「すごく成長して帰ってきた」「親と離れることで成長できる」と、プログラムが子どもにとって新たな経験や成長の機会となったと感じていた。このプログラムを機会に母親と離れることが子どもにとって良いことかどうか、いつの日か分離の必要を感じながらも、機会がなかった母親にとって、プログラム参加前には、子どもが自分の見えない所で不安にならないのか、楽しく参加できるのかと不安があった。しかしプログラム終了後の子どもの姿を見て、母親がプログラムへの満足感と、子どもにプログラムを経験させたことに満足することができたことがうかがえた。

5-3 親子に並行してプログラムを提供する意義

いつも子どもと一緒に過ごしている母親にとって、二つのプログラムは子どもを自立させることと、母親自身にとっても子どもと離れて自立していくためのきっかけとなる意義があった。プログラム参加の動機(表5)では、「親から離れる経験をさせたい」「子どもと離れたい」など、親子の分離を意識した内容を全体の50%弱にあたる10名があげており、お互いが離れて過ごすことを体験できることに期待していた。プログラム参加後には、「親子で成長できる場となった」「親子双方への良い刺激になる」など、母親自身の子どもに対する気持ちの変化、子どもの行動の変化を、母親自身が親子双方にとっての良い経験ととらえていた。同じ時間にそれぞれが別のプログラムに参加して、それぞれの時間を楽しむことができたことは、母親にとっては「私自身」を取り戻す子離れの機会となり、子どもにとっては

親と離れて学生や子ども同士で楽しい時間を過ごす親離れの機会となったと母親が感じられたことが読み取れた。

子どもがプログラムに参加し、母親はプログラムが終わるのを待つ形式では、母親の意識が変化しにくいだらうと予想される。待ち時間を自由な時間として過ごしたとしても、親役割から解放されたと感じなかったり、母親自身も親役割を果たすために空いた時間を家事や子どもの用事で過ごすことが考えられる。解放感を感じたとしても、その感情を表に出して良いとは思えないだろう。たとえば、子どものスイミングスクールのコーチに対して、「リフレッシュできました。」と言うことはなく、母親として、より親役割を果たすような言葉を発すると思われる。また、自分自身のために保育付きのプログラムに参加した場合、母親によっては子どもに対して申し訳なさを感じる場合があり、母親が子どもの成長の機会とは捉えにくいことが予想される。子どもにとっては同じように学生と過ごすプログラム内容であっても、今回の子どもプログラムは、母親にとって子どもの成長の機会であると考えられている。

本プログラムは、親と子のプログラムが並列であることで、母親が親子双方にとって経験や成長の機会として参加しており、母親自身がその効果を感じられていることから、親子双方が主役である親子並行プログラムとしてプログラムを提供した意義は大きかったと思われる。

5-4 プログラムの参加者を「ぼっけ」利用者対象に限定する意義

「ぼっけ」の利用者を対象にしたプログラムであったことと、「ぼっけ」の保育士が子どもプログラムでも保育士としても参加していたことで、プログラム終了後には「ぼっけ」がプログラム参加により生じた変化を更にフォローする場としての機能をもつことができる。母親がプログラムを通して感じた母親自身の気持ちの変化や、子どもの行動の変化を保育士に話をすることで、保育士が承認したり、気持ちや行動の意味を解説するといったフォローを続けることができる。保育士の方からも、母親が気づいていない変化を伝えることができ、それらを通して、プログラム終了後の親子の成長を継続して見守る場となっている。

変化の一例をあげると、プログラム参加前は、母親から離れられず、保育士も近づくことができなかつた子どもが、プログラム終了後には、自分から母親と離れて保育士や学生に近づくようになった。そうなることで保育士と学生は、母親と共に子どもの成長を喜び、子どもに対してプログラム終了後も働きかけを続けることが可能となる。また、「ぼっけ」での姿だけではなく、後日「ぼっけ」に来室した際に、家庭で子どもの様子が変わったと話す母親があった。プログラム参加前は、自宅の中でも父親と2人で過ごすことができず、母親にベッタリであった子どもが、プログラム終了後は、母親から離れて父親と過ごすことができるようになり、子どもが変化することによって家族の関係も変化したとのことであった。子どもにとって、プログラムが母親と子どもの母子一体の世界から、外の世界へ足を踏み出す機会となる効果があったと思われる。

5-5 大学がプログラムを提供する意義

親プログラムは、保育料を負担して、自ら自由時間を作るのではなく、大学がノンプログラム型のプログラムとして、自由な時間を提供したことによる意義が大きかったと思われる。子どもについての専門性をもつ大学から、ひととき母親役割から解放される時間を提供されたことは、母親から1人の自分に返ることが母親として時に必要なことであると承認されたような効果があり、母親たちの心理的な解放感を大きくしたと思われる。さらに、自由な時間を過ごすというノンプログラム型の時間の提供が、母親にとっての主体的な変化のきっかけとなり、親子関係を見直すことができ、リフレッシュすることでまた子育てに向かう力となったことが予想される。

子どもプログラムに関しては、専門性のある大学の企画実施であることで、内容の質の高さを期待させ、「大学生と遊ぶことは刺激になる」と大学生と接することの子どもへの効果と、「保育を勉強している大学生なので安心して預けられる」と、学生が保育の勉強をしていることによる安心感、学生の活動を教員、保育士が支えていることへの安心感があった。母親は大学の専門性に対して安心感と、子どもに良い刺激となる効果を期待しており、さらに、「ぼっけ」での継続的な支援体制の中でプログラムを提供することの意義も大きいと思われる。

大久保(2008)は、「大学生がいることを魅力に感じ、自分たちも教育に参加しているというふうにとらえてもらえれば、と考えている。「我が子の成長をたくさんの学生たちに共に喜んでもらえる」という肯定的な受け止め方を通じて、他者との創造的人間関係を体感している。」と述べているが、今回のアンケートでは、学生が子どもと関わることに、「将来を担う学生の勉強になることが良い」と子どもを学生に託すことを、学生にとって勉強になると肯定的にとらえている母親がいた。わが子が大人にとっての迷惑な存在でなく、子どもがそのままの姿でいることが学生の学びの役に立つと思えることは、母親の心理的な負担を軽減し、子どもと母親という存在への肯定感を高める効果があると思われる。母親は子どもを連れていることで、社会の中で肩身が狭い思いをすることや、子どもが迷惑をかけていると感じさせる場面に遭遇することがあり、ありのままの姿の親子が社会の役に立っていると感じられる場面は少ない。プログラムの参加、「ぼっけ」の利用により、学生の教育に協力していると親が感じるような働きかけをしていき、親子が日常の姿で参加すること、親も子育てに感じる喜びや悩みや葛藤を抱えて存在することが、学生にとって学びを機会となり、学生と子どもの成長を援助する母親も成長していく、共に育つ学びの場としての意義も大きいと考えられる。

学生は、授業の中で「ぼっけ」に来室する親子を観察し、触れ合う体験をする。次に保育所、幼稚園実習で子どもに接し保育に関して学びを深めていく。プログラムは、「ぼっけ」で親子と関わることも、実習で多数の子どもと関わることも違う学びの機会となっていた。責任を持って1人の子どもを預かること、その内容を母親に伝えるために母親と話しをすることは、「ぼっけ」でも実習でも経験できない学びの機会である。プログラムを通し

て、保育士の姿から学び、助言を受け、子どもとのかかわりを通して子どもへの理解を深め、実践的に親子について学ぶ機会となった。親と離れた子どもが自分を頼りに自立していく時間に寄り添うことで、子どもが自分を特別な存在として認識し、信頼を寄せてくれることを体験し、担当した子どもへの愛着を感じる経験ができた。開室時間の一部を子どもと過ごす「ほっけ」とは違い、プログラムでは始まりから終わりまでの2時間に責任を持つことによる達成感を感じることができた。また、学生同士が協力しながら保育を行い、下級生は、上級生の動きを学びながら保育を行い、上級生は下級生がいることが刺激となり自分の経験を下級生に伝えようとした。子どもを迎えに来た母親に子どもの様子を伝える時、子どもを通して母親と交流する経験をし、母親から感謝される喜びを味わうことができた。これはまさに保育士としての仕事の喜びに通じる体験ができたことを意味し、将来の自分の姿を具体的に想像することによる学習への意欲を高める意義を有することであろう。

「ほっけ」が教室と地域が融合した学びあい、育ちあいのひろばであるとする、と、「ほっけ」から発信したプログラムも、学生が母親、子どもと出会い、共に育つ場としての意義を果たしていたと考えられる。

6. 今後の課題

本プログラムは、プログラムの名称や形態に込めたメッセージを、親が読み取って参加をしたことによる意義があったと思われる。次の機会にはプログラムのメッセージをより強く出すような内容とすることも考えられる。また、今回のレポートは、母親へのアンケートの内容を中心に検討したが、今後、今回は考察しきれなかった、子どもプログラムの学生と子どもへの効果の詳細な検討を行うことが必要であると思われる。子どもに対しての効果の検討は、分離・再開場面での観察や、事後に母親からの聞き取りを行う事などが考えられる。学生への効果の検討としては、振り返りの会の充実、アンケートの実施などを通して効果を検討すること、その際の効果測定の方法についても検討していく必要がある。プログラムへの参加が学生にとってより良い学びの機会となるよう、子どもと保護者への接し方として、コミュニケーション能力を育てること、発達の知識を深めることなど、事前学習と事後指導を充実させることなどで、さらに学生にとってプログラムが効果的に機能すると考えられる。また、今回のプログラム経験ができた学生はのべ25名であり、限られた人数の学生の取り組みであった。「ほっけ」演習と保育実習との中間に位置する、実践的な学びの場としての機会を今後どのように学生に提供していくのかということも検討していく必要がある。

引用文献

1. 大久保秀子「浦和大学こども学部の教育理念と特色」『浦和論叢』第38号 2008年3月 19頁、
2. 樫田紋子「子育て支援における「ひろば」機能に関する一考察」『浦和論叢』第38号 2008年3月 51頁、57頁

Summary

A Consideration to the Meanings of the Parallel Programs for Parents and Children
Taken Place at the Child Community Center of Urawa University

Mitsuko Maruya, Mieko Ichikawa, Hideko Okubo
Mitsuko Ishimine, Ayako Hitsuda, Yoko Sugano
Mika Funaki, Yuko Igarashi, Takahiro Shibata

At the Child Community Center, the programs for parents with childcare by college students have been held since it was found. This time new programs were conducted as parents and children could join separately in the different programs at the same time. The name of the programs for the parents was “My Own Time”, designed for giving them two-hours free time away from their children. Another program for children was called “Playing with Big Brothers and Sisters” which was planned for enabling the children to play with college students in the drop-in “Pokke” as they were separated from their parents. According to the results of the questionnaires, parents gained a relaxation time and found an opportunity to rediscover how they love their children. Consequently, the programs have supported the growth of both parents and children. We will examine the meanings of these programs by analyzing the results of the questionnaires, observing the children’s program, listening to the students voices, and investigating continually to the relationship between parents and children.

Keywords Drop-in, Parallel Programs for Parents and Children, Growing Together,
Non-programmed

(2012年11月15日受領)

質問3 このプログラムに参加された感想をお聞かせください。

①親子別プログラムの形式について

②「My Own Time ～わたしの時間～」について

③「おにいさんおねえさんと遊べるタイム」について

質問4 本学以外で、同じような企画やお子さまの一時預かりを利用されたことはありますか？利用されたことがある方は、利用目的や時間、内容など、差し支えのない範囲でお聞かせください。

質問5 今後同様のプログラムを実施する場合、参加しようと思いますか。○をつけてください。

①はい

②いいえ

③どちらでもない

理由

理由

質問6 感想やご意見、ご要望などをご自由にお聞かせください。

ご協力ありがとうございました。